

図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第28巻1号(通巻177号) 2006.4.7

vol. 28

NO. 1

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

小坂直人

2 ダブルスクールと大学生

杉村 徹

3 本学図書館今昔

安酸敏真

4 レッティングと図書館

樋口泰裕

5 『一古書肆の思い出』をめぐる思い出

菅原浩信

6 本にまつわるエトセトラ

使おう・借りよう・探そう

7 図書館利用ガイド

8 図書館用語のポイント

編集後記

ダブルスクールと大学生

文＝小坂直人

(こさか なおと／経済学部教授)

新入生のみなさん入学おめでとうございます。

今、みなさんは大学での生活について、あれもしよう、これもしよう、とさまざま思い描いていることでしょうか。それは勉強であり、サークル活動であり、あるいは大学外の社会活動であるかもしれません。私の経験からみても、大学入学は一生の間でもっとも希望に満ちた転機のひとつとなったと思います。転機の意味合いは各人各様でしょうが、その最大の内容は「自律」ということではないでしょうか。一部の人は除いて、経済的自立を果たしている人はほとんどいないのですが、札幌にアパート等を借りて自活する人はもちろんのこと、自宅生の場合であっても高校時代とはまったく異なる「自律」的生活が可能となるからです。逆に言うと、そのような「自律」ができないと大学生としては問題ということになりそうです。

ところで、みなさんにとって大学とは何でしょうか。こんなことを改めて聞かれても困るのが本音かもしれません。「学問をすること」「学歴をつけること」「友達を作ること」「遊ぶこと」「就職の準備をすること」等々、いろいろな答えがありそうです。どの答えも間違っていないと思いますが、やはり、本質的には「学問研究の場」というべきでしょう。学歴や就職はその結果であり、友達や遊びはそのプロセスの一部だからです。大学とは何かを考える上で、近年、しばしば取り上げられる「ダブルスクール問題」が重要なヒントを与えてくれています。司法試験に受かるためには司法試験予備校に通って勉強しなければならないということはずいぶん前から言われていましたし、いわゆる「ロースクール（法科大学院）」を中心とした司法試験制度改革の重要な背景にもなったものです。この点は、司法試験だけではなく、会計士、税理士などの難関資格試験では当然のことであり、公務員、教員などの採用試験についても大学の勉強と並行してこれら予備校で勉強するのが常態化している実情があります。医学部や薬学部など、医師や薬剤師の養成を主たる目的とする卒業後の職種と直結するタイプの学部ではこのような問題は起きにくいのですが、特定の専門家を養成することを必ずしも意図していない、それゆえ、むしろ幅広い教養と一定

の専門性の獲得を目的とする学部、たとえば法律、経済、経営等の学部ではダブルスクール現象が顕著となっています。これらの学部ではより深い専門については大学院で学ぶこととし、資格試験にかかわる部分については専門学校等に依拠する形になっているのです。

このような状況は大学教育全体にも大きな影響を与えており、社会に出てすぐ役に立つ、もっと直接的に言えば、企業や会社にとって即戦力になる人材の育成を大学に求める風潮が強まっています。その結果、具体的な資格の取得につながる実学系の学部（医療、福祉、教育など）の人気は着実に伸びていますが、経済、法律系や理系の基本的学部である理工系学部はそれほど伸びてはいません。一国の技術力の基礎が学校の教育力にあることは言うまでもないことですが、肝心の生徒たちは、ますます勉強嫌い、とりわけ理科離れを起こしているのは、国の将来にとって好ましいことではありません。ここから、ノーベル賞学者をたくさん出せるように、理科系の特定分野、特定研究者に集中的に資金を投入するという一面的な政策を現政府は採用することになります。しかしながら、ノーベル賞を一国の科学・教育政策の目標とするなど愚の骨頂です。国の戦略的研究に一定の力を割くこと自体は否定しませんが、それは、土台をしっかりと作り、裾野を十分広げるといった教育研究政策があつて初めて意味あるものになるからです。

大学も社会的存在である以上、社会の変化に応じてその姿を変えてきました。同世代の半数が大学生となる時代の大学教育が、少数のエリートのみを対象とした戦前の大学教育と同じであることはできません。大学が現代においても「学問研究の場」であるとしたら、それは、かつて象牙の塔と言われた社会に閉ざされた空間としてではなく、学問研究の基礎作りを主要な任務とする、国民に広く開かれた教育空間であるべきでしょう。より進んだ教育研究は「大学院」に、より実学的な勉強は「専門学校」という分化が進みつつある現代社会の中で、大学は新しいレベルにおける研究教育機関として機能しなければならないのです。

新入生のみなさんが、こうした新しいレベルに対応した大学の一員として、「自律」を追及しつつ、自らの目標に向かってぬかりなく歩を進められることを期待しております。

本学図書館今昔

文=杉村 徹

(すぎむら とおる/工学部教授)

新入生：この建物、全部が図書館？

OB：私のいた1981年頃は今の教育会館を使っていたんだかね。1階は新聞コーナーのある閲覧室、2階の中央に開架図書と目録カードがいっぱいで、南側にカウンターと事務室…今の配置と似ているところがあるなあ。他の大学では著者名目録か書名目録なのに本学には件名目録というのがあってユニークだった。

新入生：学生証があれば図書館から本を借りられると聞いたけれど？

OB：学生証と借りたい本を見せると機械でデータを読み取ってすぐに借りられる。学生証はいろいろ使うから卒業するまで大切にね。昔は本の表紙に付いたポケットから貸し出しカードに学生番号と名前を記入して最大2冊、10日間。ところが今は最大5冊、15日間。蔵書数も1982年262,820冊で書庫はパンク状態になり、1987年4月から現在の所に移ってから2004年4月現在は761,986冊。

新入生：へーえ。ずいぶん増えた。

OB：収容可能冊数が95万冊というのでちょっと心配な気もするけれど…。平日開館の時間帯も9：30～20：00から9：00～22：00に伸びた。1階は22：30分まで。

新入生：夜も開いているのは助かるなあ。

OB：今のようになるまでは苦労があったらしい。1984年6月に貸し出しカードでなく、貸出証という裏にカーボン複写ができる2枚1組の紙を使うことになった。記入する量が増えて面倒に思ったけれど、今にして思えば「登録番号」(図書につけられる一連番号)で処理できるように切り換えた

わけで、コンピュータ処理の下準備だったのかな。

新入生：いつからコンピュータ処理になったの？

OB：地下鉄の「学園前」駅が1994年10月14日にできて5年後の1999年8月にコンピュータ・システムが導入された。今のような機械式の貸出・返却はその年の11月1日から。2000年4月にはOPAC(蔵書の公開検索システム)を2階閲覧室から利用できるようになり、2001年にはホームページで学内外からもアクセスできるようになった。昨年の11月にはリニューアルしたばかり。URLは <http://library.hokkai-s-u.ac.jp/>

新入生：コンピュータだから簡単だったね！

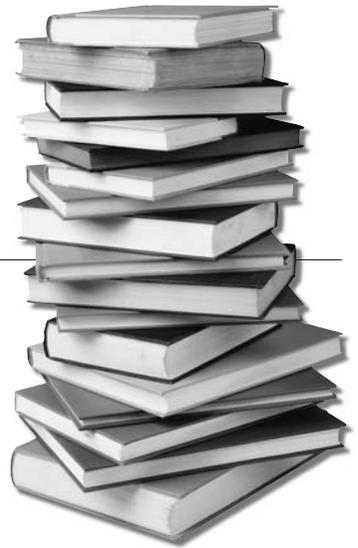
OB：とんでもない！ 今のように便利にするには約70万冊分のデータの入力が必要だったんだ。まずは開架図書7万冊の図書データの入力を急いで、2000年1月には4万5千冊、2002年8月に32万6千冊で半数近くを入力し終わった。その間はOPACとカード目録の両方を使っていた。最近、2階閲覧室のカード目録の置いてあった場所にコンピュータがたくさんあったので、古い本の入力作業はもう終わったようだね。入力したデータは国立情報研究所にも同時に登録されて共有されている。

新入生：なるほど。僕たちはちょうど利用しやすいときに入学したことになるんだ。ホームページを見ると他の図書館の本も借りられるようだし、便利そう。

OB：そのとおり！ 試験のためや、先生に言われた本を借りるばかりでなく、好きなキーワードを入れて検索してみてください。すぐに借りられるよ。今年は成年、犬も歩けば棒にあたると思うじゃないか！ ついでに返却も忘れないで。

新入生：わかりました。試してみます！

レッシングと図書館



文=安酸敏眞

(やすかた としまさ／人文学部教授)

1月末の夜中に、一面識もないナイジェリアの大学院生から突然メールが届いた。インターネットでレッシングに関する私の英語の著作を知って興味を持ったが、本国では入手する術がないので、是非一部献呈して欲しいというのである。当然のことながら、なんて厚かましい申し出だろうかと思った。拙著は2001年にOxford University Pressから出版されたものなので、購入しようと思えばインターネットで容易に買えるからである。だがそう考えるのは先進国の住人の思い上がりかもしれない。45ドルの書物はアフリカの大学院生にとっては手が出ないものかもしれないのだ。そう考えて手持ちの一冊を贈呈した。お人好しすぎたかもしれないが、自分の研究に関心を持ってくれる若者がアフリカにもいたことは嬉しい発見だった。

さて、レッシングといえは有名な^{ピロツァイ}愛書家で、図書館にも浅からぬ関係がある。1729年、ザクセンの小邑カーメンツに産声を上げたレッシングは、マイセンのギムナジウムを飛び級で卒業して、16歳でライプチヒ大学に入学した。彼ははじめのうちは「自分の全幸福は書物のなかにあると確信して」勉学に励んだが、やがて「書物はわたしを博学にするが、けっしてひとかどの人間にはしない」と悟り、読書三昧な学生生活を捨てて、人生勉強のために市井に繰り出した。「自由作家」（今でいうフリーのジャーナリスト）となったレッシングは、ベルリンを皮切りにヴィッテンベルク、ライプチヒなどを放浪した後、7年戦争のさなかプロイセン軍の司令官の秘書として陣営に赴き、約四年半プレスラウに滞在した。この期間にかつてない時間的余裕と経済的安定を得たレッシングは、スピノザやライプニッツの哲学を真剣に学び、また本格的な教父研究を行なったが、同時に大枚をはたいて「精選された蔵書」を所有するに至った。しかし苦勞して手に入れたその貴重な蔵書の大半も、その後の貧乏生活のなかで再び手放さざるを得なかった。

1770年、レッシングは長い流浪生活に終止符を打って、ブラウンシュヴァイク大公国内のヘルツォーク・アウグスト図書館の館長に就任した。ヴォルフエンビュツ

テルにあるこの図書館は、かつてライプニッツも館長を務めた由緒ある図書館であるが、ウィーンやベルリンの王立図書館とは比べものにならない。レッシングほどの人物がこのような地方都市で一생을終えざるを得なかったのは、アーレントがいうように、未だ「暗い時代」だったからである。それはともあれ、ルターイザナの宗教改革以後最も熾烈な神学論争といわれる「断片論争」(Fragmentenstreit)は、レッシングがこの図書館内で発見したと称して出版した、H・S・ライマールスの遺稿に端を発している。この論争の詳細については拙著を参照して戴きたいが、わたしは、1988年と1999年の二回にわたって、ヴォルフエンビュツテルを訪れた。往時の佇まいを今に伝えるレッシングハウスに隣接するヘルツォーク・アウグスト図書館は、レッシングの人格と偉業と相俟って、訪れる人々を真理探求の想いへと誘わずにはおかない。

翻って考えた場合、我が国の学生たちは大学図書館に足を踏み入れたとき一体何を感じるのだろうか。インフォメーション・センターとしての大学図書館は、学生たちに豊富な知識や情報を提供してくれよう。だが、その知識や情報の集積が真理探求に結びつかない場合には、若い魂ははたしてどこに導かれるのだろうか。アナクロニズムと揶揄されるかもしれないが、大学図書館は真理への畏敬を呼び起こす知的空間でなければならない、とわたしは考えている。本学の図書館をそういう視点から問い直してみることは、ひょっとしたら徒事ではないかもしれない。

『一古書肆の思い出』をめぐる思い出

文＝樋口泰裕

(ひぐち やすひろ／法学部助教授)

全五巻、反町茂雄著、平凡社。札幌の教育大学で過ごした学部生の頃、この本を読み、古本稼業に憧れて古本の転売をしていたことがある。何てことはない、安く購入した古本を高く引き取ってくれそうな別の古本屋に持ち込む、ただそれだけのことである。古本屋巡りが好きだった。その頃の僕のテリトリーだった麻生から札幌駅北口までの、いわゆる北大通り界隈に建つ古本屋は、巡回などと称して週三四回くらいは覗いていた。それに東区、すすきの、琴似あたりの数軒を加えた足の及ぶ範囲であれば、各店の品揃えの傾向、価格の付け方くらいは素人なりに把握しているつもりでいた。古書の価格には大体の相場というものがある。ただ、それでも実際に付ける価格は店によって差があり、店の好み・守備範囲によっては存外大きく違ったりするものだ。また、一律半額の店など、相場にほとんど従わない店では、モノによっては相場よりもずっと安い値段が付けられていることがしばしばあり、そうした古本屋間の価格差に目を付けたのであった。所詮素人の真似事だから、そううまくいくはずもないのであるが、もとより金儲けは二の次の、業界周辺をうろつきたいだけの遊びのようなものだったし、それでも確実なモノを仕入れれば、大きな赤字にならずに済んだので結構楽しめたように思う。

当時よく仕入れたモノの筆頭は、現在も文庫本の中で一段高見から清ましている岩波文庫である。中でも狙い目は元値自体が安い戦前ないし戦後間もない時期に出版された古い版で、一律半額店などで仕入れ、三十冊くらいにまとめて岩波文庫優遇店に持っていくと、それなりの金額で引き取ってくれた。時には知らずに絶版モノが混じっていることもあり、その度ごとに勉強になった。組モノは、安くなった端本を地道に買い集めて組が完成するまでじっと待つのが肝要である。おかげで、同じ本同じ巻の在庫が十冊近くにのぼることもあったが、それはそれで並べてみると壮観で、なかなか楽しく、また欠けていた一冊を見つけたときの喜びは格別であった。文庫本ではサンリオSF文庫もよく探した。僕は生来SFは読まないの、中身の価値は全くわからないのだけど、当時すでに絶版で、真面目な古書店では概してイイ値段が付けられていることは知っていた。ある時、均一棚しか置かない店で、古めのもの五十冊余りが値札も付けず

に紐に括られたまま放置されているという奇跡に遭遇したことがあった。見つけた時の感動、交渉の際の緊張感(といっても、素知らぬ顔で買っただけなのですか)はいまでも忘れられない。文庫以外では、少し古めの小説、エッセイ集の初版本なども蒐集した。主に自分が好んで読んでいた戦後派から中上健次あたりまでの現代作家モノを対象にしていた。思うに当時は、一律半額店のような、良く言えば回転重視型、悪く言えば無思想型の古本屋はいまほどには多くなかった分、開拓されてもいなかったもので、そういった店でも品揃えは玉石混淆とはいえ、玉の度合いがなかなか高かった。また、いまより幾らか時代が近かったということもあり(中上や安部、埴谷も死んでいなかった。大江もまだノーベル賞受賞前である)、歩き回れば、彼らの函付き帯付き初版本を均一ワゴンなどに見つけることができたのだ。これも相応の店に持っていくと、快く引き取ってもらえた。また、初版本ならずとも、作家ごとにある程度まとまっていれば、色を付けて引き取ってもらえることもあった。これは気分もよかった。愛する作家の著書が明日にも処分さればかりの三冊100円ワゴンなどの中に見つけてしまうと、黙って通り過ぎるには忍びないのが人の情というものである。そんなのを見つけるたびに、救助と称して買い求め、再び世に送り出す準備をしていたのであった。当時の僕はすでに亡き高橋和巳に心酔するかなり遅れてきた青年(笑)だったのであるが、氏の著作はよく救ったもので、河出書房から出された全九巻、別巻一の『作品集』の端本などをせっせと集めたものである。ただ、このシリーズは、思うに第九巻『中国文学論集』と別巻『詩人の運命』はあまり世に出回らなかったと見え、この二冊だけは端本としてなかなかめぐり逢えず、前の部分の在庫が増え続けるばかりで、結局二組くらいしか揃えてやれなかった。いまも実家の物置を探せば、一〜八巻だけの未完セットが五六組は出てくるはずだ。

以上、古書肆に憧れていた頃の僕の思い出である。僕にとって、反町茂雄はいまでも神様のような存在の人である。

本にまつわるエトセトラ etc...

文＝菅原浩信

(すがわら ひろのぶ／経営学部講師)

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。これから少なくとも4年間は学生生活を送ることになるわけですが、その学生生活に付き物のアイテムといえば、やはり「本」なのであります。

では、どんな本を読んでみようかと考えてみるところから、この話は始まります。現在、購入可能な本というのは世の中に数え切れないくらいあるわけです。教科書などのようにすでに読むべき本が明確な場合は別として、読んでみたい本を探すには、そのためのツールが必要です。例えば、新聞や雑誌の書評とか広告、メーリングリストなどが参考になると思われます。ただ、「これは！」と思って買いに行き実物を見てみたら、自分のイメージしていたものとは違い「あれっ？」と首をひねることもよくあります。しかし、それくらいでめげてはいけません。

次に、読みたい本が決まったら、どうやってそれを買うかということになります。購入手段としては、インターネットか書店かということになるでしょう。前者は、パソコンの前から買うことができ便利です。しかし、実物を見ることはできません。読者の若干のコメントがあるにしても、それが必ずしも自分の感覚と合っているとは限りません。また、手元に届くまで時間がかかります。一方、後者は、実物をチェックすることができます。しかし、人込みをかきわけて出かけなければならず、結構疲れるし、交通費もかかります。専門書の場合には在庫がなく取り寄せとなるケースもあります。困ったことに、「せっかく来たのだから…」と、ついつい余計なものまで買ってしまふこともあります。結局、一長一短ということになるようです。

そういえば、その昔（といってもつい数年前のことですか）サラリーマン兼大学院生だった頃、専門書ともなると札幌の書店ではなかなか見当たらず、3週間くらいかけて取り寄せるか、あるいは東京出張のついでに八重洲ブックセンターや神田の三省堂書店なんかを探しに行ったことを思い出します。今ではインターネットか札幌の書店でほぼ事足りるようです。すいぶん楽になったものです。

ところで、書店で本を買うときには、たいてい「カバーをかけますか」と聞かれるはずですが。みなさんはどうしますか。地下鉄やバスなどで読書をしている人を見ると、ほとんどの人の本にはカバーがかかっているようです。これは、どんな本を読んでいるのかを他人には知られたくないという心理が働くのでしょうか。ただ、同じ書店のカバーをかけた新書を何冊かカバンに入れておくと、どれがどの本だかわからなくなり、そのときに読みたい本をすぐに取り出せずに、焦ることもあります（「1冊にしとけ」というツツコミはしないこと）。

さて、本を買ってきたら、すぐに読めばいいのですが、いわゆる「積ん読」になる人もいます。なぜ「積ん読」になってしまうのでしょうか。たぶん、とにかく買ってきて積んどくだけで、もう読んだ気になり満足してしまうのではないかと思います。この症状が進行すると、本を買うことがストレス解消の手段になってしまうという恐ろしい事態に陥ります。その後しばらくして、積んでおいた本の山が何かの拍子に崩壊したときになってはじめて、「あ、読まねば〜」と気づくことになるのです。

それで、ようやく読む気になった本をどこで読むのかわからないか考えるわけです。自宅、大学、落ち着いた喫茶店なんかで読むのが普通なのでしょうが、意外とファストフード店のようにザワザワしたところで読んだりもします。これは、本を読むしかない（つまり、他にやることがない）という状況に自分を追い込まないと、なかなか本（特に専門書のたぐい）が読めないということだと思われます（あくまで筆者の場合。かなり情けないですね…）。

ここまできて、図書館だよりのはずなのに、図書館のことを何も書いていないのに気がつきました。先日、論文を探すべく書庫に入ろうとしたら、係の方に呼び止められました。どうも教員ではなく学生に間違えられたようです。これを「若く見られた」と喜ぶべきか、「教員のオーラがない」と悲しむべきか、未だに悩んでいます。

最後に、新入生のみなさんは、こういうオチのない文章ではなく、ちゃんとした文章が書いてある「本」を読むようにしましょう。図書館で借りて。

使おう・借りよう・探そう

図書館利用ガイド

図書館利用案内を見よう!

「利用案内」では、簡単な図書館の使い方をたくさん載せています。

図書館を使おう!

たくさんの蔵書がある!

本館(豊平校舎):文系中心、かつ一般教養

工学部図書室(山鼻校舎):土木、建築、電子中心

朝9時から夜10時まで開館している!

インターネットが使える!

レポートや論文をゆっくり書ける!

文献が探せる&手に入れられる!

文献を探すには、インターネットやOPAC(公開検索)を使ったり、テキストに載っている参考文献を利用するなど、いろいろな方法があります。

本学図書館に所蔵している図書館資料は、著作権の範囲内でコピーを取ったり、借りることができます。本学にないものは、他の大学図書館や機関から取り寄せできます。

詳しくは、サービス・カウンターに相談を!

本を借りよう!

- ・学生証と借りたい図書をサービス・カウンターに提出してください。
- ・貸出は5冊、15日間まで。期限内にサービス・カウンターで手続きをして、予約がなければ延長できます。
- ・返本は、サービス・カウンターにお出しください。
(業務終了後は、返却ポストに投函してください)

本を探そう!

本学図書館に所蔵している図書館資料は、OPACで検索することができます。

開架図書

本館2F、もしくは3Fの書棚に配架されています。

閉架図書

書庫にある図書です。請求票出力、もしくはOPAC備え付けの「閲覧証」をご記入の上、サービス・カウンターまで申し込んでください。

工学部図書

工学部図書室で所蔵する図書です。本館からは取り寄せが可能です。

読みたい本、見たい本があったら

図書館に所蔵していない購入希望図書があれば、「購入希望図書申込書」に記入して、購入希望図書ポストへ投函、または、サービス・カウンターへ申し出よう。

情報を探そう!

●利用の前に、サービス・カウンターで申し込み手続きをしよう!

PC(情報検索)ブースを使う!

PCブースでは、インターネットとCD-ROMの利用ができます。本学のOPACになかったら、NACSIS Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>) を使ってみよう。これは、全国の大学図書館の蔵書を調べるデータベースです。見つけた本の利用については、レファレンス・カウンターで相談しよう。

AV(視聴覚)ブースを使う!

AVブースでは、カセット・テープ、ビデオ・テープ、CD、LD、DVDなどの視聴覚資料が利用できます。サービス・カウンター横にある視聴覚資料所蔵リストで見たいものを探してください。

なお、個人の持込利用はできません。

図書館用語の

ポイント

●OPAC (公開検索)

Online Public Access Catalog の略で、オンライン検索資料目録といえます。本学では「公開検索」と呼び、資料をデータベース化していますので、どんな資料が所蔵されているかを調べることができます。

●参考文献

研究や調査目的のために参考となる文献資料。

●図書館資料のコピー

著作権の範囲内で、コピーが可能です。

●レファレンス

参考業務ともいう。利用者の求めに応じて図書館員が資料の検索や提供などのサービスを行うこと。

●NACSIS Webcat

国立情報学研究所が提供しているWeb上での総合目録データベース。全国の大学図書館が共同作成しているもので、どこの図書館が所蔵しているかを調べることができる。

●書誌情報

個々の資料を識別できるように、書名、著者名、出版社などの事項を一定の方式にしたがって記述、配列したりリスト。

●所蔵情報

OPACで、希望の資料が所蔵されている場合、その配架場所、所蔵ID、ステータス(資料の状態)、請求記号などの情報のこと。複本があると何件も表示される。

●配架場所

配置場所のこと。本学では本館開架、本館閉架、工学部開架、工学部閉架など。

●開架、閉架

利用者が直接書架から自由に図書資料を選んで利用できる図書を開架図書、また、書庫内にある図書を閉架図書

といえます。閉架図書の場合、係員に取出しを請求します。同じ図書が開架、閉架双方にある場合は、開架の図書を利用してください。

●請求記号

図書資料の配架されている位置を示す記号。一般的には、分類番号と図書記号(著者記号)の組合せで表している。

●請求記号とは!?

分類番号	→ 918.6
著者記号	→ Y89
巻数等	→ 17

●分類番号

日本十進分類法によって分類された番号。

●図書記号

同一分類番号を付与された複数の資料をさらに個別化するための記号。本学では、著者記号を使用。

●著者記号

著者を表す記号。著者の読み(カタカナ、ひらがな、ローマ字など)及びタイトル名から綴りの初字(1から3字)または数字との組合せでできています。

●予約

利用したい図書が貸出中の場合、予約をすることができます。

●購入希望図書ポスト

図書館に所蔵していない図書、欲しい図書は、購入希望を出してください。

●製本雑誌

雑誌類何冊かを綴じあわせて扱いやすいように一冊にまとめたもの。本学では製本すると貸出できます。

●白書

政府や地方公共団体が出す公的報告書。

●目録

蔵書を検索するために書名、著者名、件名、分類番号などを一定の配列に編成したもの。

●奥付け(おくづけ)

図書の末尾にある書名、著者、発行者、発行年月日、定価等の記載されたページ。

編集後記

みなさんこんにちは、ビッグフットです。ようやく春の日差しを感じられる季節がやってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。さて、春といえば、みなさんは何を思い浮かべますか? 春……といえば、やはり「お花見」に「桜」と連想される方が多いのではないのでしょうか。図書館にも、お花見や桜に関する図書があります。

そこでこの一冊。「日本の夜桜」所蔵ID:0536186 請求記号:748/SHO

全国の桜の名所を丁寧に解説していて、これからの時期にはピッタリな1冊になっています。夜桜はあまり意識したことは無かったのですが、これがとても綺麗なんですな〜。道内の名所も4ヶ所紹介されているので、ビッグフットはこれを参考に今年の春を満喫しようかと計画中……これとは別に、花より団子計画も進めています……

みなさんも機会があればぜひ、一度読んでみてはいかがでしょうか。

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第28巻1号 (通巻177号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
TEL (011) 841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所: (株) アイワード